たかさご史話39

～古代の印南郡家～

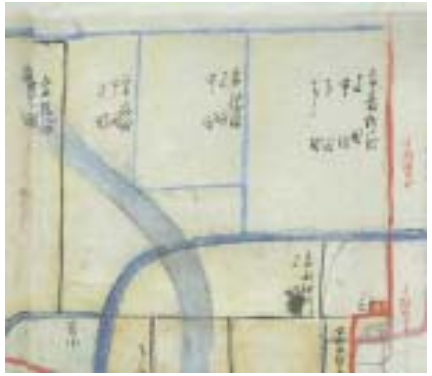
現在の地方行政の中枢が県庁や市役所などにあるように、古代の地域行政の中心は、国では国府・国衙、郡では郡家・郡衙にありました。郡家の置かれていた場所には、現在でも「郡家」や「郡」「郡山」などの地名が残っている場合が少なくありません。

高砂市の大半が含まれる播磨国印南郡の郡家の位置については、『播磨国風土記』にみえる大国里の故地である加古川市西神吉町大国付近や、益気御宅の故地と考えられる加古川市平荘町付近に求められてきました。大国里には百姓の家が多くあったという『風土記』の記載や、大化以前の屯倉（御宅）をもとに郡家が建設されたという認識が、そうした考え方の背景にあったものと思われます。

一方、一九七〇年代に発掘調査が行われた高砂市鍋田の塩田遺跡からは、「三宅」「大使」「北家」などと墨書された奈良時代・平安時代の土器や、「伊保田司」とヘラ書きされた円面硯が出土していましたが、江戸時代の『曽根村字別地図』には塩田や鍋田に接して「香利屋」の字名がみえていることから、近年ではこの地が印南郡家の所在地として注目されるようになってきました。

塩田遺跡のある高砂市鍋田付近は、古代山陽道の南に接する位置にあたり、交通の要衝と考えられることからも、ここに古代の印南郡家が置かれていた可能性はきわめて高いといえるでしょう。

（高砂市史編さん専門委員　西本　昌弘）



▲曽根村字別絵図より